



フレーズ&センテンス

「私のなかには、今でも五歳の時の自分が棲んでるの」

日本の子どもの本の礎を築いた石井桃子さん。編集者、翻訳家、そして作家としての珠玉の「ことば」を集めた1冊です。著作が全てカラー写真で紹介され、自分を含め、どれほどの子どもたちがその恩恵にあずかってきたかと感慨に浸りました。彼女がいなければ日本の子どもの本はどうなっていたのでしょうか。101歳で亡くなるまでの生涯を豊富な写真とその「ことば」で振り返ります。未来の子どもたちも、その作品と「ことば」にふれながら成長してほしいと願わずにはいられません。今、そばに置いて毎日開きたい本ナンバーワンです。

『石井桃子のことば』中川李枝子 松井直 松岡享子 若菜晃子ほか/著 新潮社 とんぼの本 (中井)

今月の1冊

『実践!園防災まるわかりBOOK』 国崎 信江/著 メイト

防災の日にちなみ、9月は訓練や防災に関する意識が高まる月ですよね。今月ご紹介する本は「園」防災の名の通り、保育園や幼稚園での災害対策について書かれているのですが、読んでみてびっくり！ 地域のハザードマップの活用や登校中、外遊び中、食事中、昼寝中など細かなシチュエーション別に対策が紹介されています。「小さな子どもなんていない」「保育園や幼稚園なんて縁がない」という方も多いと思いますが、大きな災害があった時、災害現場でいちいち細かな説明なんていらるのでしょうか？ 小さな子どもにも一言で伝わるような逃げ方や身の守り方が必要だと思いますか？ イラスト入りで読みやすく、対策案も簡潔に書かれているので、ぜひご一読ください。 (田中)

Cinema library 第6回 ものすごくうるさくて、ありえないほど近い

2001年9月に起きたアメリカの同時多発テロは、まだ記憶に新しい方も多いのではないでしょうか。この物語は、あの日世界貿易センタービルで父親を亡くした少年、オスカーが主人公です。大好きだった父親を突然亡くし、悄然と過ごしていたオスカーは、ある日父親の部屋で花瓶の中に隠されていた鍵を見つけます。それが父親からの秘密のメッセージだと気付いたオスカーは、鍵にぴったりと合う鍵穴を見つけようと決心し、鍵がしまわれていた封筒に書かれた「B I a c k」という文字だけを頼りに、鍵穴探しを始めます。

「カギ穴を探しにアパートを出たたび、ぼくは少し軽くなって、というのはパパに近くなるからだけど、少し重たくもなって、それはママから遠くなるからだった。」…原作に書かれたこの文章は、映画にも登場します。鍵穴を探すこと、それはオスカーにとって父親を探すことにも等しいことでした。大切な人を失ったとき、その喪失にどう向き合うか、そして、どう折り合いをつけるのか。その答えは、きっと人それぞれでしょう。あるいは、答えなんて最初から無いかもしれません。それでも日々は続していくし、遺された者は一步一歩、歩きつづけなければいけないと、そう教えられた物語でした。

・『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』ジョナサン・サフラン・フォア/著 NHK出版

・『マンハッタン、9月11日 生還者たちの証言』ディーン・E.マーフィー/著 中央公論新社

次回は『レモニー・スニケットの世にも不幸せな物語』です。お楽しみに！

(丸山)



読書の窓

9月「お医者さん」

9月9日は救急の日です。そこでお医者さんにまつわる本をいくつかご紹介します。私たちが知らない一面を知ることができる本ばかりですよ。是非読んでみてください。

『ぼくとチェルノブイリのこどもたちの5年間』

菅谷昭/著 ポプラ社

チェルノブイリ原子力発電所で爆発事故が起こりました。その結果、恐るべき放射能により人々は甲状腺ガンの被害を受けました。そこで病魔と闘う子供たちの治療のために、一人立ち上がった菅谷医師の5年半の体験と事実が記されています。日本の福島原発事故はこのような被害になりませんでしたが、他人事だとは感じられない考え方させられる1冊です。 (佐藤)

『東京消防庁芝消防署24時』

すべては命を守るために』岩貞るみこ/著 講談社

「ちゃんとできて、あたりまえ」作中に何度も登場するこの言葉。消防士の仕事は、すべてこの一言に集約されます。辛くて厳しい訓練をこなすのも、自分の身をなげうって救助活動に当たるのも、すべてが「あたりまえ」。これほど強さ、優しさを、私は知りません。尊敬の念を新たにした本でした。

(丸山)

『医者が患者をだますとき 女性編』

ロバート・メンデルソン/著 草思社

「セカンドオピニオン」や「インフォームドコンセント」などといった言葉を最近はよく耳にしますが、その重要性がひしひしと伝わる本です。約10年前のアメリカの話ではありますが、自分の体のことは自分で責任をもって考えなければいけない、というのは現代の日本でも同じだと思います。子宮がんや乳がんなど、女性の病気についても参考になります。(丸山)

・『わたし、獣医になります！ アメリカ動物病院記』

井上夕香/著 ポプラ社

・『いま伝えたい大切なこと いのち・時・平和』

日野原重明/著 日本放送出版協会



次回の読書の窓は
11月号です

10月「天使」

10月4日は天使の日です。天使に関連する本をいくつかご紹介します。本の中でどのような天使が登場するのか、是非読んでみてください。

『青い馬と天使 いつもいっしょにいたいんだ』

ウルフ・スタルク/作 ほるぶ出版

甘えん坊でやきもちやきの神さまは、いつも一緒にいてくれる天使が大好き。ある日、神さまが作った青い馬に命を吹きこむと、たちまち天使と馬は恋に落ちてしまいます。神さまはなんだか仲間外れになったような気分で、つい「馬なんか、いなくなれ」と願ってしまい・・・。絶大な力を持ちながらも、まだ子どもである神さま。果たして、3人の結末は？

(田中)

『不思議な翼』

優しさと勇気と夢を運ぶ大人の童話集』

ウィリアム・J・ベネット/著 実務教育出版 「モラル」をテーマにした77の童話を収録しました。その中の1つ『不思議な翼』では、5人の小さな天使たちが泣いている子どもたちを元気づけるために地上に舞い降ります。けれど地上には楽しい誘惑がいっぱい・・・。天使たちは無事に子どもたちを助け、天国に帰ることができますのでしょうか？ (熊谷)

『ヨーロッパ天使の旅』

若月伸一/文・写真 東京書籍

ヨーロッパ各所の天使を巡った旅行記ですが、生き立ちや歴史も知ることができます。読み進めると、美術作品、彫刻、建造物の壁画など、様々な形をなす天使の写真が数多く掲載され、どれをとっても息をのむような美しさ！ ヨーロッパにはこれほど多くの天使がいるのかと、街に根付いている様に驚かされます。写真だけでも充分に天使を堪能できます。 (本田)

・『クレーの天使』

谷川俊太郎/著 講談社

・『クリスマスの天使』

C・W・パックストン/著 講談社